

その他

激動の我が青春

愛知県 森 桂 吾

私達の榮光に輝くべき大学の卒業式はまた、戦争への門出でもあった、昭和十七（一九四二）年十月一日、仙台東部第二十二部隊歩兵連隊に陸軍二等兵として入隊。いわゆる初年兵の始まりであり、まさに激動の我が青春の始まりでもあった。

男が成人すると、好むと好まざるとにかかわらず秀才でも、金持ちの息子でも、大臣の子供でも、百姓のせがれでも一切の区別なく、あらゆる自由も無く、何事の一片の弁解も許されず、ビンタという名の暴力が

公然とまかり通る軍隊という特殊社会に入らねばならなかった。それは拒否と選択が許されない国家の至上命令であり、これに反することは非国民としての汚名を着るのみならず、一家親類一同にわたり大きな不名誉なこと、村八分の社会的制裁を受けねばならなかった。

町の人、友人、知人、親類と大勢の方々から祝福を受け盛大な壮行会を開いてもらい、日の丸の旗の波、歓呼の聲に送られ入隊してみると、ある程度の覚悟はしていたが、見たと聞いたでは大違い、想像だにできなかったことが次から次へと起きてくる。

一汁一菜、たまに納豆が出ると大ご馳走。そしてこんな歌が歌われた「いやだいやだ軍隊はカネの茶碗にカネのハシ、ほとけ様でもあるまいに一膳メシとは情

けない」と。

衣服は下着まで全部お古。何人もの先輩が着たもので、袖の長いのもあれば、ズボンの短いのもあり、靴も大きさがピッタリなんていうことはあり得ない。自分の体に衣類を合わせて着るのではなく、衣類に自分の体を合わせるという。

朝起きる起床ラップで始まり、夜になって床に就く消灯ラップまで、一日の行動がラップで始まりラップで終わる。「ラップのマークの正露丸」と言う薬のテレビコマーシャルに鳴りわたるラップのメロディーは「食事ラップ」で、言葉を合わせると「炊事の奴はいいとこ食って、おいらは残飯だ」と言うことになり、夜寝る時の消灯ラップは「初年兵は可愛いやなあー、また寝て泣くのかなあー」といささか哀愁をおびたメロディーで、これは毎日の軍隊生活の辛さに夜寝床に入って泣いている様子を歌ったメロディーである。

毎日の演習のつらさ、規律の厳しき、汚れた下着を着ていると早速ビンタのお見舞、といって洗濯する時間もなく、揚げ句に上官の下着まで洗濯しなければな

らない。食事の用意、食後の後始末、掃除、雑用は皆初年兵の肩にかかっている。少しでも手を抜くと「セミの鳴き声」といって柱に登り、自分の鼻をおさえてセミの鳴き声をまねる。あるいは「ウグイスの谷渡り」と称してベッドの下にもぐり、隣のベッドとの間から顔を出し、またもぐって次のベッドとの間から顔を出す。こんな罰則がすぐ適用される。楽しみの無い軍隊生活はこんなことを見ては余興を楽しむ思いだったのかと思う。

また、不寝番といって夜中に一時間、寝ずの番が回ってくるし、一週間に一回は馬屋当番があり、馬の寝ずの番をして朝になると馬を馬小屋の外に出し、馬の体にブラシをかけてやったり、尻尾をつまんで上にあげ肛門をふいたり、足のツメを水で洗い、蹄油という油を塗ってやったり、殊に冬になるとツメを洗う桶の水が冷たく、すぐ霜焼けにかかり、手の甲がピンク色になり、饅頭のようにふくらみ、皮が裂けて出血したりする。

その間、幹部候補生の試験がある。この試験に合格

すれば、軍刀つって馬に乗れる将校になる道が開かれるが、不合格になると一兵卒として過ごさねばならぬ。将校と兵卒ではその待遇はすべての点で雲泥の差。といって勉強できる時間は演習中の休憩時間の二十分ぐらい、トイレに入っている時、夜消灯になってから明かりが外にもれないように毛布をかぶって懐中電灯でコッソリ本を読む。寸暇を惜しむとはこんな事だろう。

いろいろな矛盾と非合理性が存在するそんな七カ月の初年兵生活も乗り越えて、大学卒十六人中合格三人。その三人の中に入った時は嬉しくてなかなか眠れなかった。そして前橋陸軍予備士官学校入校になったのである。

前橋と言っても榛名山の中腹で、学校の周囲は背の丈くらいの雑草と林だけで民家はほとんどない。国定忠治で有名な赤城の山が近くにそびえている。外出、面会一切無し、区隊長と称する教官はマレー半島のブリキテマ、コタバルの激戦で顔から体中キズだらけのパリパリの大尉で軍人精神の権化のような人。

入校した当日、「この学校は毎年死亡者が出るが、お前達は該当者になるな」等の訓示が出るほどで、学校という特殊社会に監禁され、今から猛訓練するぞという宣告である。とんでもないところに入校してしまつたと一時は合格したことを悔やんだが後の祭りである。

学校での生活は人間の体力の限界をはるかに超えた猛訓練、一分のスキも許されない厳格そのものの規律、すべての点で初年兵時代を過ごした軍隊とは比べものにならない。私達の一年先輩で、せっかく入校出来たのにつらさに耐え切れず、将校になる夢も捨てて自殺した人もいたと聞く。この学校を代表するラッパのメロディーに言葉をあてはめると「榛名山の麓の気違い学校」と歌われたが全くその通りであった。学校での生活を一部取り上げてみると

1、起床ラッパが鳴り、起きて服を着、毛布をシワ一つないようにたたみ、枕を一線に揃え、窓ガラスをど真ん中に開け、靴を履いて校庭に出て全員整列完了まで五分間、校舎の出口に下士官が剣道で使う竹

刀を振り上げて待ち構えており、五分を経過した者は竹刀でいきなり頭を殴られる。

2、校舎から一步でも校庭に出たら駆け足、歩いているのが見つかると思倉（学校の留置所）一日の罰。

3、集合時間一分遅れたために一分間の時間の誤差があると戦闘機なら何キロ飛んで行くし、騎兵隊なら何キロ進行する。作戦に大きな誤差が生ずるということで、罰として校庭を三周六キロの全力疾走。

4、敵襲があったと仮定して夜中に突然起こされ、武装して整列するという「非常呼集」と称されることが一晩に十三回。寝る時間全く無し。

5、慶応卒業の男爵の息子ともう一人が、敬礼の仕方を間違えたために、「将校生徒たる者が間違えるとは何事か」と言うことで全員集合。百五十人の前でカシの木刀で尻を十回たたかれ、内出血で陸軍病院に入院してしまった。

6、こんな中にも嬉しいことがあった。バラチフス、腸チフス、赤痢の三種混合の予防注射の日である。

この日ばかりは先がスリ減って丸くなった注射針で

予防注射されると、午後はずっと寝かしてくれた。寝ることが嬉しく、また予防注射の日が来ないかと待ち焦がれたものである。

このような敵しさに耐えることは非常に得難く万金に値する人生経験で「逆境は無言の教師である」「逆境にまさる教師無し」と言う諺があるが、むべなるかなと思う。

根性、勇氣、正義感、責任感、使命感、自己犠牲の精神、そして「知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は恐れず」といった指揮官としての精神的要素が培われた。

また、教官にお前達は「江戸の火事見て木曾へとべ」という諺を忘れるなど言われた。これは江戸時代に江戸が火事になると、家が密集して、消火設備も無いため大火事になり、家を建てる人が急に多くなるため、木材が値上がりするので、火事だといってボンヤリ見てないで、木曾に向かって一日散に走り、他人が来る前に材木を買い占めてひともうけするんだという意味である。戦地に行った場合頭の回転が遅く、古く

なった蛍光灯のように、スイッチを入れてもしばらくたないとかかないような指揮官では負け戦になるぞということ、頭のスピードアップが強く要求された。

また、戦友という、普通の友達との友情とは違った純粋でぬくもりのある一生の心の財産と言え友人が出来たのもこの頃である。「友の愛に我は泣き、我喜びに友は舞う」戦友との友情はこのようなものであると思う。

頭はともかくとして、体の方はぶっても、たたいも死にそうもない超甲種合格、そして競争率七倍の関門をくぐり抜けて入校した百五十人も、卒業出来たのは百人。四十人は体力が続かず途中で挫折、退学してしまった。

十二月は一日千秋の想いで待ちに待った卒業式の時である。今度は将校としてどこに行くか、南方に行きたいと思っていたら、勤務先は北方の札幌と発表され「成績が悪かったからか」と悔やむことしきり。しかし終戦になってみると、喜んで南方に行った戦友たち

は、硫黄島、サイパン、グアム、沖縄、フィリピンのルソン島、バギオの作戦で戦死した者が多く、成績優秀な者が戦死し、私のような劣等生が生きて帰ってくる。運命とは皮肉なものである。

とにかく札幌の北部第七十五部隊に到着し、翌朝トイレに行ったらカチンカチンと音がする。のぞいてみたら、トイレ掃除当番の兵隊が、大便が寒さで凍って富士山のように高く積み重なって使用出来なくなっている、鉄の棒で砕いているのであった。

着任して二十日ほどたったら連隊長に呼ばれ、占守島に派遣隊長として行ってくれとの命令、NOはあり得ないので承知し、いよいよ戦地への出番がきたと思っただ。

出発は小樽に集結し、八千トンくらいの輸送船に乗り込み青森県にある海軍の根拠地の大湊により、そこで輸送船六隻、駆逐艦二隻、巡洋艦一隻といった船団を編成して大湊を出発。この時は日本の見納めかと思うと複雑な気持ちであった。

航路は潜水艦からの魚雷攻撃を避けるために太平洋に出たり、オホーツク海に入ったり、また太平洋とジグザクコースで、普通なら二日か三日で行けるところを二十日もかかって到着。その間出港してから十日目頃だったと思うが、私の乗った船の後の船が魚雷攻撃を受けて沈没。船が沈む前に海に飛び込むが、スクリューが回っているため、船から遠くに離れる前に吸い込まれて血しぶきが立ち上り、見るも悲惨であった。冬のオホーツク海は、海に飛び込んでも三十分ももたないうちに凍死してしまうと言われている。

やっこの思いで目的地占守島についたら、海辺の砂浜で黄色になった凍死体をダビ（火葬）に付している。その臭いが鼻に残ってなかなか消えない。

島に着いた夜は、これで今夜から船に揺られず、魚雷攻撃の心配もなくゆっくり眠れると思いきや、夜の九時頃になったらアツツ島、キスカ島から飛んできたB29の空爆。爆弾が落下する時爆弾と空気が摩擦するのでヒューヒューと音がするが、夜で真つ暗闇のため、飛行機も落下する爆弾も見えないのでヒュー

ヒューと音がする度に自分の頭上に命中し、今度はやられるかと思いい、兵隊の中には恐くて泣く者もあり、それをなだめたり、元気付けたりするのも私の役割の一つであった。

着任して十日ほどたつと、朝十時頃と夜九時頃になると定期便のように毎日爆弾を投下してはおどしに来るなあとと思い、そして爆弾はなかなか命中することは少ないことも分かり、夜も熟睡できるようになった。

ただ、十月頃から翌年の四月頃までは、夜明けが午前十時頃、午後三時頃になると暗くなってしまい、そうかと思うと七月から九月頃までは夜明けが午前二時頃、日が暮れるのが十時頃。これにはなかなか慣れず、とくに困ったことは冬の間の吹雪、今まで青空だったのが急に曇って風速四〇メートルから五〇メートルくらい吹雪がやってくる。一メートル先も見えない。温度も零下四〇度くらいまで下がり、方向が分からなくなつて凍死してしまう場合もあり、空爆での戦死者の数の半分ぐらいいは凍死者だったと思う。

印度地方のインパール作戦に参加した友人の話では日中は五〇度近い暑さのため行動出来ず、夜になって涼しくなってきたから行動開始するが、いつも朝になると兵隊の数が少ない。変だと思つて気を付けていると、夜中に密林から虎が出てきて一人で歩哨に立っている兵隊にコッソリ近づき、いきなりジャンプして食わえて密林に逃げ込む。これには虎の動作が速いので手のつけようがなかったと。加藤清正でも墓場から呼び戻したかたんなつて言つていた。戦争は敵の軍隊だけとの戦いではなく戦場の気候、風土、動物との戦いでもあり、四面楚歌が戦争だと思ふ。

私自身も夜に戦闘指揮に行つての帰り道、照明弾を落とされ機銃掃射をくつたことが四回、輸送船に乗船中魚雷攻撃を受け、船が魚雷をかわしてくれたので助かったことが二回、空爆を受けた時は破片が私の頭上を通り越してくれたので命拾ひしたこと一回と、七回の試練があつたが、昭和二十年、私の中隊に占守島より撤収命令がきたので、大きい船では魚雷攻撃と空爆の餌食になるので二千トンぐらいの小さな船で小樽に

帰つてきた。

北海道八雲で終戦を迎えたが、占守島に残つた多くの戦友達はカムチャツカ半島から重戦車を先頭にしたロシアの大軍に攻撃され、全員玉碎した。誠に遺憾の極みであり慚愧に堪えない次第である。その戦死者の中に、兵器を八キロ先の陣地に運ぶのに積雪三メートル、そして吹雪でどうしようもなく困り果てていた時に、荷物運搬用の戦車五台を貸してくれた恩人の戦車第十一連隊の連隊長池田末男大佐が名を連ねておつたことはまことに残念であつた。

ロシアが攻撃して来た時に先頭切つて突撃し、立派な最期を遂げたことを息子さんから聞かされ、あらためて戦争のおろかさ、悲しさを痛感させられた。

戦争が終わつた後は必ずと言つてもよいくらい新興宗教がたくさん生まれる。古くは鎌倉時代、源義朝と弟の為朝の兄弟が戦つた保元の乱、そして室町時代の応仁の乱、これも親父と息子、兄と弟が戦つた大戦争

で、これも終わった後は新興宗教がたくさん生まれた。太平洋戦争後も二百五十から三百の宗教が生まれたと言われている。これは戦争で若くして短い一生を終えた戦死者が一番気の毒だけれども、残された家族はその悲しみを一生背負って生き続けなければならぬ。その悲しみ、無情さ、はかなさを宗教に救いを求めるのも当然だと思う。

私の同期生が硫黄島で戦死、三つ上の兄がルソン島のバギオの作戦で死亡。母は気が狂い、精神病院に入退院を繰り返して、最後には尼になったと聞いている。

戦争は勝っても負けても払う犠牲があまりにも大きく、そして悲惨で惨めである。ことに「人間の生命は地球より重く」「災害は忘れた頃にやってくる」と言われている。再びこのような惨事を起こさないように子々孫々、友人知人に語り部として言い伝えるのも我々戦争体験者の義務だと思う。

考えてみると、私達はかつて拒否と選択が許されない国家の至上命令により軍務に服し、「生きて捕虜の

辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ」といった軍人精神をたたきこまれて戦闘に参加し、九死に一生を得て帰って来たわけ、私達に青春があったとすれば常軌を越えた命がけの猛訓練、そして戦地での死の恐怖との戦いの連日といった灰色の軍服の青春だったと思う。

移りゆく歳月の流れが、戦争の記憶を遠くに押しやり、その恐ろしさ、惨めさ、悲しさ、苦しさ、空しさを忘れさせようとしています。そしてその戦いのために尊き一命を捧げた若い人達のことを語る人さえ少なくなりつつあります。私達は生ある限りあの激戦に玉砕し、あの大空で散り、あの荒野の土と化し、紺碧の海深く沈み、密林の奥深く草むらに斃れて、その短い生涯を終えられた戦友達のことを忘れることは出来ません。

どんなにか生きて父母の膝下に戻りたかったでしょう。どんなにか愛する弟妹と会いたかったでしょう。同じ道を歩きながら生きて還れた私達なればこそ、兄弟等の心情がしみじみと分かります。在天の御霊よ安ら

かにお眠りください。心から黙禱を捧げたいと思いません。

船舶工兵第三十連隊

福岡県 高瀬 充 夫

私は、大正十二（一九二三）年五月十日、福岡県京都郡伊良原村、農業を営む家の六人兄弟姉（男三人、女三人）の末子として生まれました。昭和十八年徴集兵として兵隊検査を京都郡役場で受け、甲種合格でした。

私の略歴の要は次のとおりです。

昭和十九（一九四四）年五月一日 船舶工兵第六連隊に入営

八月十六日 船舶工兵第三十連隊に転属

十一月一日 一等兵に進級

十二月三十一日 北九州市門司港出発

昭和二十年一月一日 上等兵に進級

輸送船「海宝丸」に乗船

一月九日 台湾高雄港上陸

十二月三十日 内地帰還のため高雄港を出

発

昭和二十一年一月二日 広島県大竹港上陸

三日 広島県上陸地にて除隊

学校を卒業後、昭和十六年自動車運転手として行橋市で貨物自動車会社に勤務しておりました。私の仲間の同年輩者や同級生はほとんど軍隊へ行きましたが、私は、本来なら昭和十八年三月入隊予定であったのが延期され、昭和十九年五月一日、山口県柳井の船舶工兵第六連隊に入営しました。

私の現役の証書には戦車隊と書かれてあったのが、入営してみたら船舶工兵でした。入営が他より遅くなったのは、兵種の変更というためであったのか、と後になって思いました。何しろ、私は海のこと、水のこと全然判りませんから困りました。

最初は手旗信号から教わりましたが、前もって予備知識を持って練習していればよかったです、予期